

## 主日礼拝説教「天から降り注ぎ、地は耕される」予稿

日本基督教団石神井教会 2021年10月24日

### 【旧約聖書日課】創世記 2章4～9節

4これが天地創造の由来である。

主なる神が地と天を造られたとき、<sup>5</sup>地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。

<sup>6</sup>しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。<sup>7</sup>主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。<sup>8</sup>主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。<sup>9</sup>主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいせられた。

### 【使徒書日課】ヨハネの黙示録 4章1～11節

<sup>1</sup>その後、わたしが見ていると、見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパが響くようにわたしに語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。「ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう。」<sup>2</sup>わたしは、たちまち“霊”に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている方がおられた。<sup>3</sup>その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。<sup>4</sup>また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。<sup>5</sup>玉座からは、稲妻、さまざまな音、雷が起こった。また、玉座の前には、七つのともし火が燃えていた。これは神の七つの霊である。<sup>6</sup>また、玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。

この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があった。<sup>7</sup>第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。<sup>8</sup>この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りにも内側にも、一面に目があった。彼らは、昼も夜も絶え間なく言い続けた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

全能者である神、主、

かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」

9玉座に座っておられ、世々限りなく生きておられる方に、これらの生き物が、  
栄光と誉れをたたえて感謝をささげると、 10二十四人の長老は、玉座に着い  
ておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、  
自分たちの冠を玉座の前に投げ出して言った。

11「主よ、わたしたちの神よ、

あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。

あなたは万物を造られ、

御心によって万物は存在し、

また創造されたからです。」

## 見よ、開かれた門が天に！【こども説教のために】

先週の「在天会員記念礼拝」には、いつもは他の教会に出席されている関係者もご出席くださいました。その中には、昨年来の感染症対策で礼拝で讃美を歌うことをいまだ控えているという教会からおいでくださった方もありました。わたしたちの教会では、窓を全開にして換気を十分にしているという条件付きですが、ほとんど従来と同じように礼拝で讃美を歌っています。ただし、皆がマスクを着けたままですから、以前のように歌声を大きく響かせ合いながら、ということにはなっていないかもしれません。

けれども、わたしたちは、たとえ讃美の歌声が十分なものでなくても、地上の教会で営まれる礼拝には、荘厳な讃美の大合唱が響き渡っていることを知っています。天上の礼拝で天使たちが歌い交わす讃美が、開かれた天の門を通して、地上の教会の礼拝にまで響いてきているからです。

「**聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな**」。そう歌い交わされる讃美を、幻の中で天上に引き上げられたヨハネは耳にしました。それは、かつて預言者イザヤが神殿で礼拝を執り行ったときにも耳にした、天使たち（セラフィム≡ケルビム）の歌う賛美です（イザヤ6章）。この讃美は、天上の礼拝と地上の礼拝を結ぶ歌なのです。

教会は、この「聖なるかな」と三度繰り返す讃美を、「聖餐」の中で歌うことを伝統としてきました。地上で「食事の儀式」として行われる「聖餐」が、天上の「大宴会」と結ばれたものであることを確かめてきたのです。「聖餐」を祝わない礼拝でも、「聖なるかな」を歌うならば、わたしたちの地上の礼拝が天上の礼拝と結ばれていることを知るようになるでしょう。

天の門は開かれ、天上から荘厳な讃美の歌声が響いてきています、「**聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな**」と。この讃美の歌声を聞き取りましょう。天上から降り注ぐ讃美によって、地上に生きるわたしたちは皆、神の子らとしての命を与えられ、養われ、光り輝く者とされているのです。

## 神が結び合わせてくださった！

今日は、「福音書」の朗読を省略しましたが、「旧約」の朗読も、後半部を省略しました。そこには、神が人（アダム）を土（アダマー）の塵からお造りになられた後、「人が独りでいるのはいるのはよくない。彼に合う助ける者を造ろう」とおっしゃられて、「男」と「女」が造り出されたことが語られています（創世記2章）。

「福音書」は、主イエスがこの「創世記」の箇所を引用されて教えられた逸話の箇所が日課として定められていました（マルコ10章）。いわく、「**天地創造の初めから、神は人を男と女とお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。**」（マルコ10:6~9）

主イエスがこれを教えられたのは、ファリサイ派の人々が、律法の定めとして離縁が認められていること（申命記24章）を指摘したからです。律法の規定に従えば、離婚は認められるのです。けれども、教会は、主イエスの教えを優先して、原則として離婚を認めない立場を長らく取ってきました。

実際には、キリスト者であっても離婚することはあります。かつては、離婚によって教会からも離れてしまった信者が少なくありませんでしたが、最近は教会内で離婚歴が問題にされるようなことはほとんどありません。むしろ、現代の教会にとって大きな問題は、「結婚」そのものの扱いに移っています。結婚する人が少なくなっているのも問題の一つですが、それ以上に、「結婚」観が多様化した現代社会の中で、教会がその多様性にどこまで応ずることができるのかということが問題になっているのです。それによって教会が分裂する事態さえ惹き起こされているのです。

もはや、こうなると、主イエスが結婚に関連して教えられたことの本意が見失われているのではないと言わざるを得ません。「**神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない**」と教えられていることを巡って、教会が互いを引き離しかねない事態となってしまうのです。教会こそ、主イエスによってしか互いを受け入れ合うことのなかった異質で多様な者たちが一つにされ、神の御前に結び合わされた群れであるはずなのに、です。

確かに、**神は人を男と女とお造りになられたのです**。わたしは、若い頃に生物学研究を志した者として、性の多様性があることを知っているつもりです。それでも、男と女という二分法で人を理解することは重要です。男と女こそ、全人類に普遍的な、もっとも理解しがたい異質な存在であることは間違いないからです。そして、互いに異質であるからこそ、神は「**彼に合う助ける者**」（創2:18）になるとおっしゃられているに違いないのです。

## わたしたちの「地」を耕そう！

わたしたちは、自然な成り行きに任せていれば、互いに似た者同士が近づき、異質な者は遠ざけるものです。それが、当面は安全なことだからです。あるいは、たとえ一見すると異質に見えても、相手が自分の意に従う者であれば、近くに置くことはあるかもしれません。逆に、傍から見れば似た者同士であっても、一方が他方に対して自分の意に従わないことを受け入れられず、互いを遠ざけることもあるかもしれません。そういうことが、わたしたちの生活のあらゆる場面で、際限なく繰り返されています。人間関係は、いかにも複雑怪奇で、時間も労力もかかることなのです。

若い人たちの中には、そういう人間関係に無駄なコストを掛けたくないと考える者も少なくないようです。インターネットを用いた「マッチングアプリ」というものがあります。自分のプロフィールや趣味、価値観などを登録すると、それに見合った相手を紹介してくれるのです。そこから交際を始め、結婚にまで至る人も少なくありません。男女の「マッチング」ばかりではないようです。何でも、自分に似た者、自分好みの者、自分と同質のものを選べば、うまくいく、無駄なコストを支払わずに済む、というのです。

実のところ、それは、若い人たちだけの考え方ではないのでしょうか。わたしたち自身も含めて、現代の社会全体が、そういう価値観に染まっているのです。いいえ、そもそも人間は本質的に、そのような価値観を生まれながら内包しているものなのかもしれません。しかし、それで通用していたのは、人類がせいぜい150人程度の群れで生活していた時代までです。世界中が大きな社会に組み込まれていく歴史の中で人類が経験してきたことは、常に異質な存在と対峙しなければならない、ということでした。それは、今に至るまで、続いているのです。

最終的に、どこに行き着くのでしょうか。可能性は二つ。一つは、全体が完全な同質の社会になること。もう一つは、互いに異質であってもそれを認め、受け入れ合う社会になること。このいずれかでしょう。

教会は、後者の社会こそが「神の御心」であると信じて歩んできました。主イエスがそうお教えになられたと信じた弟子たちが、教会の営みを始めたのです。それは、確かに労苦を伴う営みのはずです。相容れない考えの者によって拒まれる可能性のある実践です。けれども、わたしたちは、神が天地をお造りになられたときから、人はそのように生きる者として作られていたと、信じてきました。人（アダム）は、自らが取られた土（アダマー）を耕す者として楽園に置かれたのです。それは、互いを耕し合うことにほかなりません。わたしたちは信じています。耕されるならば、そこには必ず、命の木が生え出で、善悪の知識の木が生え出でることになるのです。